

【Insectopia (インセクトピア)】とは： insect (虫) と utopia (理想郷) を掛け合わせた造語
『蟲たちを含む、地球上に生きる全ての仲間が快適に生きることができる世界』を創るため、SHELLグループがお届けする情報発信ニュースレター。



なぜトコジラミは復活したのか？

近年、国内外でトコジラミの被害報告が相次ぎ、ホテルや宿泊施設だけでなく、公共交通機関や一般家庭にまで影響が広がっています。かつては大幅に減少したものの、現在は世界的な再流行が続いています。その背景を振り返りながら、企業や施設に求められる害虫リスクへの備えについて考えていきます。

一度は激減したトコジラミ

トコジラミは人の生活環境に適応した代表的な吸血性害虫です。戦後しばらくの間は、日本で広く見られましたが、1950年代以降は殺虫剤の普及や住環境の改善によって発生件数が大幅に減少しました。

しかし2000年代に入ると状況は変化しました。薬剤抵抗性をもつ個体の増加や国際的な人の移動の活発化を背景に、欧米を中心として再流行が報告されるようになりました。さらにコロナ禍後には海外旅行やインバウンド需要が急速に回復し、フランスや韓国での被害拡大が大きく報じられ、日本国内でも被害相談の増加が続いています。

復活を支えた3つの要因

①殺虫剤に強い「薬剤抵抗性」

トコジラミ再流行の最大の要因として挙げられるのが、薬剤抵抗性の発達です。長年にわたり同系統の殺虫剤が使用された結果、一部の個体群では薬剤が効きにくくなりました。以前であれば短期間で駆除できたケースでも、現在は慎重な調査や複数の対策を組み合わせた防除を行わなければ、完全駆除が難しい場合があります。

②人の移動が再流行を後押し

ここ数年、訪日客や物流の動きが再び活発化するなかで、人や物の移動量が増加しています。トコジラミはスーツケースや衣類などに潜み、人とともに各地へ運ばれることで分布を広げます。

海外で発生した問題が短期間で国内へ持ち込まれる可能性も高まっており、グローバル化が進む現代では、一地域の害虫問題が世界規模の課題へ発展するケースも珍しくありません。

③宿泊施設を中心とした拡散リスク

宿泊施設は多くの利用者が出入りするため、トコジラミにとって拡散しやすい環境のひとつです。もちろん、トコジラミが発生したからといって施設の衛生管理が不十分であるとは限りません。むしろ清潔なホテルや旅館でも持ち込みによる発生は起こり得ます。一度侵入したトコジラミは、ベッド周辺のわずかな隙間や家具の裏などに潜伏し、人目につかないまま増殖することがあります。このため、早期発見と初動対応が被害拡大を防ぐ鍵となります。

流行害虫への対応は「備え」が鍵

トコジラミは突然現れた新しい害虫ではありません。しかし、社会環境の変化や薬剤抵抗性の発達により、その脅威は再び大きなものとなりました。そして重要なのは、このような事例はトコジラミだけに限らないということです。近年は海外由来の害虫や外来生物、新たな薬剤抵抗性害虫など、従来とは異なるリスクが次々と報告されています。こうした流行害虫への対応では、被害が発生してから慌てて対策を検討するのではなく、日頃から最新情報を収集し、関係部署や専門業者との連携体制を整えておくことが重要です。

変化の早い時代だからこそ、企業には「害虫が発生しない環境づくり」だけでなく、「新たなリスクへ素早く対応できる体制づくり」が求められています。

シェルグループ自社開発のトコジラミ早期発見ツール販売中！

詳しくは[こちら](#)▶



「害虫が出てから」ではなく、「出る前に備える」という選択

シェルグループの「ペストコンサルテーション」は、建築計画の初期段階から施設運用後まで、衛生リスクを分析し、有害生物の発生リスクを低減するサービスです。害虫獣の侵入や繁殖を未然に防ぎ、竣工後のアフターメンテナンスまで一貫して支援することで、持続的な衛生環境の維持に貢献します。

今回は、異なる業態で導入いただいた2つの事例をご紹介します。

宿泊施設におけるトコジラミ対策/&Here TOKYO UENO
東京・上野でレジデンス型ホテルを運営する「&Here TOKYO UENO」では、インバウンドを含む多くの宿泊客を迎えるなか、トコジラミをはじめとした持ち込み害虫への対策が大きな課題でした。加えて、上野公園や飲食店街に近い立地であることから、衛生環境の維持を重要視していました。

同施設では、シェルグループによる館内調査やリスク評価を実施。客室ごとのトラップ設置計画を整備したことで、スタッフ主体での運用が可能となりました。その結果、継続的な予防管理体制が構築され、安心して宿泊できる環境づくりにつながっています。



写真：&Here TOKYO UENO



写真：SANU 2nd Home

自然共生型施設におけるアリ侵入対策/SANU 2nd Home

自然共生型宿泊施設「SANU 2nd Home」では、豊かな自然環境の中に建つ木造施設ならではの課題として、夏季のアリ侵入に悩まされていました。市販薬剤での対応や清掃時の対策だけでは十分な効果が得られず、現場スタッフの負担も増加していたといえます。

同施設では、シェルグループによるヒアリングと現地調査を実施し、アリの侵入経路や発生要因を分析。自然との共生を大切にする施設コンセプトを踏まえながら、薬剤への過度な依存を避けた予防的害虫管理の仕組みを提案しました。課題の可視化と対策方針の整理を進めたことで、現場の運用負荷軽減を実現。さらに、全国の拠点へ展開可能な管理モデルの構築にもつながっています。

予防管理が施設の価値を守る

害虫対策に求められるのは、発生後の対応だけではなく、施設ごとのリスクを見極め、継続的な予防管理を行うことで、利用者の安心や施設ブランドの維持につながります。

ペストコンサルテーションは、予防的害虫管理を通じて、これからも施設の価値を支えていきます。

今月のInsect



写真/解説
中峰 空
8thCAL技術顧問
筑波公園昆虫館館長



ケカゲロウ (毛蟬)

アミメカゲロウ目ケカゲロウ科
学名：Isoscelipteron pectinatum

前翅長13mm前後で全身に毛が多いのが特徴。夏から晩夏にかけて発生するがあまり見かけることはない。ケカゲロウ科の起源は古く、およそ2億4000～3000万年前の中生代三畳紀の地層から化石が見つかった。幼虫成虫ともに詳細な生態は不明だが、日本のケカゲロウの幼虫はシロアリを捕食することが知られている。

Information

●Pick up NEWS

シェルグループ代表・岡部が「from Foe to Friend—厄介者と人の関係を探る共同リサーチ」に登壇します！

岡部は、11月12日開催のセッション「厄介者と人の接点を作り直す」にて、「駆除の手前で何ができるか—害虫展と予防の設計から接点をデザインする」をテーマに登壇予定です。これまで取り組んできた『害虫展』や環境衛生の現場での経験をもとに、「厄介者」とされる生きものと人との関係性についてお話しします。

主催：株式会社ロフトワーク

イベント詳細：[from Foe to Friend—厄介者と人の関係を探る共同リサーチ](#)



Insectopia インセクトピアの配信登録はこちらから！

QRコードを読み取り後、登録フォームよりご登録ください。ニュースリリースや採用情報、イベントなどの最新情報を配信中です。

